明治の佐伯三青年（三）

――龍渓・鳴鶴・鶴谷――

東京　御手洗一而

二、矢野の慶応義塾入学

明治三年の佐伯藩は、権少参事西名勝昌が集議院議員になり、三月には佐久間盛承が大参事に任ぜられ、古賀成美が権大参事兼集議院議員になっていた。この公議人は、その都度上京してくるので、在京の矢野は、佐伯の状況は逐一知っていた。時々は林のことを思い出していたが、身辺の環境変化が急激なことと、都会生活に不馴れなこともあって、自分のことを考えるだけでせい一杯だった。そして、佐伯の騒動が禁錮問題にまで発展したのを知ったのは、明治四年の年が明けてからであった。だから、秋月先生の言葉が、ことさら他人事とは思えなかった。その上、秋月先生に会うと、江村塾の教課に疑問を抱くようになっていた。四教堂の方がましであったとさえ思うようになっていた。ようやくにして矢野の頭の中には、「青年の学問」の方向転換がかすめつゝあったのである。先生の言った「薩長の国ではない。日本の国である」の真意が、父の雑談の中にも理解できるようになっていた。そして、統一国家の形態が、西洋各国の研究におかれていることも知って、洋学への関心が、急に頭をもたげつゝあった。春になって、弟の武雄が大学南校に入学したのも、転換の一つの動機にはなった。そして、矢野は三月に芝新銭座の慶応義塾に入学した。塾は間もなく三田に移転するが、入門帳によると、

生年・出身地　嘉永三年十二月一日
　　豊後佐伯藩（士族藩士矢野光儀長男）
慶応義塾入学年月日　明治四年三月四日
　　二十二才

証人　荘田平五郎
入門帳記載番号　二―二三六

とある。ちなみに証人の荘田平五郎は、臼杵の藩士で、この時塾の教師を勤め、のちに三菱商会入社以来三十六年間同社首脳として活躍、明治生命、日本郵船などの重役を歴任した人である。

その頃、地方騒乱の不安を知った新政府は、東京治安確立のために、「御親兵」や「ポリス」の要員を薩長土の三藩から召し出して上京させていた。これは、「廃藩置縣」断行の下準備であったが、前年におこった長州藩の脱隊騒動や、続いておこった豊後日田県騒乱にみる不平分子の決起を予測して、地元の東京をかためるためであった。

佐伯藩の禁錮騒動も、日田と時を同じくしておこった。しかし、これらに対応する中央政府の取締りは、すばやく強力であった。日田騒乱に関しては、長州藩の脱走兵士と草莽層が日田地方に入りこみ、農民と結合した事件である。佐伯藩の場合も、前記の兵隊党と学校党の衝突だけか、山口県脱徒をかくまったものか、その真相は未だに謎とされている。そして、『世路日記』の著者である佐藤（菊亭）鶴谷の『鶴谷外史聞見筆録・佐伯藩士禁錮騒動之顚末記』にも、次のように不明とされている。

（略）兵隊党諸氏の中には、予が知人も二・三あり、其生存中、予はしばしば当年の真事実を質問したるも、何故か何人も箝黙敢て事情を告げざりき。是を以て結党の真相に至りては、今日も之を詳らかにする事を得ず、山口縣の脱徒を潜伏致させたる始末が不埒に云々というも、他所の浪士が佐伯に潜伏せしなどとは長三洲どもの外、聞きも及ばざる所なり。

のちによくこの物語りに現れる佐藤鶴谷（菊亭香水・蔵太郎）は自伝によると、安政二年（一八五五）七月十日、佐伯藩士佐藤瀬録の長男に生れ、この頃明治三年十六才のとき、関令蔵の私塾暇習館や松岡員外の学半堂塾に学び、漢籍や詩文を修めつゝあった。前記の遺稿を書いたときは、すでに中央を去り、郷土史家として県下に名をなしていた。

このような不平分子の騒乱は、全国至るところにめば

えていたが、予期していた新政府の処置は、意外に速く強力で、巡察使の派遣や藩兵の指揮は、如実に中央政府の兵権統一を示すものであった。しかし、保守的な小藩の下級武士にあっては、旧藩主と統一中央政権の交替があっても、そんなことはどうでもよかった。まして、これからの日本の在り方なんか、幕外から芝居を見るようなものである。それよりも、家禄の削減や士族・卒族の身分差別、片手落ちの兵制改革の方が問題である。この不平不満は明治十年の西南の役まで尾を引くことになる。

この禁錮騒動が起ったとき、町全体が浮き足たって、今にも戦争が起り、町は焼け野が原になると風評が流れた。藩校四教堂はすでに閉ざされ、塾で学習どころの落着きはなかった。

林は、なすこともなく毎日ぶらぶらしていた。下級藩士の不満は、頭で理解し得ても、直接禄を食んでいなかった林にとっては、ピンとこなかった。

「矢野がいたら議論ぐらいできるのだが」

と考えてもみた。

小さな町で新しい職業もない。たまに楠先生を訪うても、町の騒々しさに気負されて勉学に身も入らない。目標のない毎日がたいくつでしかたがなかった。気がむけば、矢野に貸った書籍をひもとくが、それも日が経つにつれて遠去かってゆく。矢野が残していった「時がくれば」を考えないでもなかったが、「時がこない」ような気もした。そして、自分から積極的に時を探す方法もしらなかった。

慶応義塾に入校した矢野の生活は、急角度に転換した洋学のスタートラインに立っていた。塾の洋学は英学であった。英学というより、朝から晩まで英学習得の一辺倒であった。はじめ、矢野の眼には異様に映ったにちがいない。少年時代からあこがれた「一里に届く大砲」と「大汽船」の夢が、英学を通して新科学に投影したにちがいない。遠い彼方の方に。そして、新橋汐留と横浜桜木町間に鉄道の建設も着手されていた。それも一切を英人技師にまかせ切りであることもよく知っていた。「同じ人間のやることでありながら」、矢野は何がそうさせたかを知りたかった。これらの興味は、後年矢野が滞英中の通信につぶさに報道されている。

この頃の矢野は、初歩からの英語をおっかけながら、

『西洋事情』をむさぼり読んでいた。『西洋事情』は、塾の創始者である福沢諭吉が、慶応二年から明治三年にわたって訳述したものである。矢野にとっては、塾生としての義務感もあったが、なによりも当時では西洋諸国を知る唯一つの手引書であった。すなわち、福沢が文久二年に渡欧の際入手したイギリスのチェンバーズ版『経済読本』や幕末時代二度目の渡米の際輸入したアメリカのウェーランドの『経済論』である。特に後者は、彰義隊で知られる上野の山の合戦の時、江戸市中の砲声を聞きながら、塾生をいましめて経済書を講義したという、有名なエピソードに出てくる『経済論』である。なおこの『経済論』の講義は、明治二年頃高弟の小幡篤次郎に譲って、自分は「修身論」の講義にきりかえた事実が知られている。

儒教による漢学の知識しかなかった矢野が、福沢精神たる独立自尊の信念にふれ、実学・人権・科学・合理主義の根本を教えられたときの驚きは、想像にあまりある。しかもそれが、わずか一、二冊の西洋書の翻訳であることを知ったときの矢野は、洋学に対して果してなにを感じただろうか。手に負えぬと思ったかもしれない。追いつくことの新たな斗争心が湧いたに違いない。

すでに卒業生達は、福沢精神をふまえて、あるいは教職の道に、あるいは実業の分野に飛び出している。日を追うにつれて、

「果して自分の進むべき道は」

こんなことを考え出したとき、

「これだ。これこそこれからの学問だ。一人でどれだけのことができる。人材が要る。人材が」

矢野は、再び父の言葉を思い出した。

「これだ。これこそ林に学ばせてやりたい。塾生を見廻しても林ほどの人材は他にいない」

確信をもって、矢野は郷里の林を思い浮かべていた。

矢野の英語学習はまっしぐらであった。他のことを考える必要はなかった。語学力を習得して、原書の読めることに没頭した。目標の定まった毎日に、生活の充実を感じた。新天地を見出した矢野は、江村塾に浪費に近い後悔も感じたし、許嫁のことなど眼中になかった。

その頃の義塾は十二の階級に分かれ、春秋二季に昇級

試験を行ない、能力に応じて何級でも進級することができた。四教堂の英才をもって任じた矢野にとって、この仕組みは大へんな励みとともに歓迎された。しかし、漢学に精進した矢野に、わずらわしいこともあった。矢野が在宅中は、独学の書生達の質問攻めにあうことであった。これには矢野も閉口したが、かといって無下にことわることもできなかった。近頃では若党までが、書生達の漢学熱におかされていた。

こんな時に、矢野はふと妙案を考えついた。

三、友　情

七月になると、いよいよ廃藩置県が断行されて、太政官新政府の中央集権統一は、着々とその実行に移されていた。各藩知事（旧藩主）を華族に列して上京を命じたのも、その一つの施策であった。三条右大臣・岩倉外務卿以外は、公卿・諸侯を除いて、西郷・木戸・板垣・大隈を参議とする薩長土肥の藩閥政府を作り、これらの改変に強い自信をもっていた。じじつ借金の多い旧藩にとって、新政府の借金肩がわりは、わるい取り引きではなかった。しかし維新の改革で士族の得るものはなにもなかった。新政府に雇われた官吏が、伝統的な武士の名をとどめるにすぎず、少数のこれらの種族を除いて、あとの武士は、みじんにも切捨てられた形になっていた。

上京して新しい知識を吸収するにも、かなりの費用がかゝり、ほんの限られた者だけであった。その点、矢野は恵まれた方である。父の新政府就任が、矢野に開運の鍵を与え、新しく福沢諭吉なる師を得たことが、矢野の一生を支えたといっても過言ではない。

明治四年七月十四日廃藩置県の詔書が発せられてから、はじめて父光儀が葛飾から帰ってきた。矢野はまだ塾から帰っていなかった。高齢の祖父が大分弱っているのも気掛りだが、文雄の成長をみるのも楽しみであった。夕暮れ近く帰宅した矢野は、門をくぐってばったり旧知の久作に出遇った。

「やあ、今お帰りですか。お父さんがお帰りですよ」

久作は、律儀そうにお辞儀した。

「久作殿、暫くだなあ、今日は何用で」

矢野も軽く頭を下げた。

「いやなに、大阪からついでに佐伯まで足をのばそう

と思いまして、御挨拶に上りました」
「なに佐伯」
矢野は佐伯と聞いて、稲妻のようなひらめきがあった。久作の袖を引いて、無理矢理に自室に引き入れようとした。驚いたのは久作の方である。
「何事かございましたか」
久作は、座るのももどかしげであった。
「久作殿、わしの一生の願いを聞いてくれぬか。いやどうしても聞いて貰わねばならぬ」
矢野のせっぱつまったような顔付きから、久作は大へんな相談事であることを察しても、なんのことかさっぱり予想できなかった。金のことでもなければ、女のことでもあるまい。矢野にはレツという許嫁がいる。たゞまじまじと矢野の顔を見詰めている。
「一生の願とは又大げさなことを、一体どのようなことでございます」
久作も真剣な顔付きになった。
「佐伯に行ったら、人一人伴ってきてくれぬか」
意外な申し出に、久作はどう返答してよいものかためらった。
「人を連れてこいと申されましても、どのような人ですか。若党なら東京にでも探せますが」
久作の返事が終らないうちに、矢野のさわやかな弁舌が始まった。
「わしの親友じゃ。林というてな、背の低い小男だが、四教堂きっての秀才だ。今どうしているか連絡もとれないが、昨今の禁錮騒動で勉強どころではあるまい。わしは今度慶応義塾に入ってから、福沢先生の新しい英学に眼を開かれた。そいつをどうしても林に学ばせてやりたい。必ず国家かために役に立つ仕事をする奴だ。佐伯に埋もれさすには惜しい男なんだ。世の中が変れば、新しい科学の分野に多くの人材が要る。奴が洋学を通して何を発見するか大へんな興味がある。それに、昨年別れるときに約束した友情もある。どうしても連れてきてくれ、頼む」
矢野は久作に向って頭を下げた。
「矢野さん、それほどの人材がどうして……」
矢野は続けた。
「林は家が貧乏なんだ。旧藩時代は旧来の漢学だけで間に合ったし、金もいらなかったが、時代の要請と新

しい学問は、東京でなければ間に合わぬ。かといって、金のない奴は身動きもできぬ。変な世の中になった。なあ久作どん。旅費や一切の費用はあとでなんとかする。この機会を失っては、二度と林の上京はないかもしれぬ。頼む、是が非でも連れてきてくれ」

久作は、聞きながら胸のあつくなるのを覚えた。自分だけが食うことを考える時代に、友情であれ、人材観であれ、矢野の人柄が偲ばれてならなかった。一途な青年の思いやりが、大げさにいえば新国家の建設を象徴しているようでもあった。

「東京に伴って、それからどうされますか」

「住むところはこゝにある。それからさきはどうともなる。わしの金を半分にしても奴を見捨てることはできない。国でさえも先の見通しはたゝんが、まさか日本の国が滅びることはあるまい。奴だって死ぬことはない」

こゝまで言われて、久作は引き受けない訳にはいかなかった。

「そこまで言われますなら、確かに連れてまいりましょう。但し父君は御承知でございますか」

矢野は一瞬ぎくりとした。

「父に頼むぐらいならそちには頼まん。これはあくまでわし一人の存念じゃ」

不気嫌そうに武士言葉になった。

「連れてくれれば、長屋の書生に漢学を教える手もある。費用のことは出世払いという手もある。だから折入って久作殿に頼んだまでじゃ。そなたが出立すれば、父や祖父にも話はする」

久作は、矢野の深慮な存念を聞いて、いまさら何も言うことはなかった。必ずこの青年は何かやると思わざるを得なかった。

「承知しました」

久作は両手をついて深々と頭を下げた。矢野のほっとした笑顔がよかった。

二人の話を聞いていたかのように、タイミングよく許嫁のレツが茶を運んできて雑談に移った。

矢野は、廃藩置縣による藩主（佐伯県知事）の上京で、藩船が往来することも示唆し、林が義塾入校の証人についてまで話す手廻しのよさだった。久作の佐伯行きは一つの目的があった。今までは藩の財源として名のあった

佐伯半紙についてである。藩の専売品であった紙が、維新後の紙座閉鎖から、どのような制度をとるかは問題であった。じじつ地方では、とくに佐伯など東京より遠隔の地では、打つ手もなくそのまゝの状態であった。久作のねらいもそこにあった。矢野は、久作の帰り際、林宛に『西洋事情』の一冊を依頼することを忘れなかった。

廃藩置県は第二の明治維新といわれる。この統一機構の整備は電光石火の早業であった。大した混乱も起きなかったのは、すでに各藩の財政は底をつき、立ち上る余裕もなかったからである。これからの統治整理は、火事場騒ぎの跡始末のような目まぐるしさである。

太政官制は、正院・左院・右院の三院制がとられ、正院は万機総判の最高機関とし、太政大臣・納言（八月から左右大臣）・参議の三職をおく。左院は官選の議長・議員からなり立法機関とし、右院は行政府として八省と開拓使に整理された。軍事面は、東京・大阪・鎮西・東北に四鎮台をおき、各県下に多少の常備軍をおいた。地方行政は、はじめ三府三〇二県が成立するが、これも十一月までに三府七二県に整理する。その下の行政区画は大・小区制とし、区、戸長制をとり、のちに戸籍を編成することになる。

こうした矢継ぎ早やの改革は、太政官布告として日常茶飯事にまで及んで数えきれなかった。これらのことは、外国の真似事であれなんであれ、国内統一過程として必要なことであった。いろいろな矛盾を問題にするひまもなかった。だいいち新しい官吏に現金を支払い、税金を米で集めてもどうしようもなかった。これが地租の改正につながる。農民は自由に好きなものを作り、農地そのものも自由に売買できるようになる。これが明治五年の二月の地券の証拠物となり、大名の土地がやっと農民の手に渡るわけである。

内政もさることながら、維新はもともと外圧から強いられたのが発端である。外国との辺境問題や外交問題等、内外の急務は堰を切った水のように流れてくる。このために、この年の十月には、岩倉使節団として明治新政府の首脳が大挙して欧米を視察することになる。

この軍事・司法・財政・教育その他種々の全国組織が、専門の官僚を必要とし、のちの官僚群を作り上げることになる。

この新政府模索時代に、矢野は英学による経済原理をせっせと義塾で学んでいた。新政府が探すものと、一塾生が探すものが同じであるというのも考えてみれば面白い。時代の流れではなくて、流れてきた時代を受け止めねばならなかった。そして、矢野という人間の生きるのにふさわしい時代でもあった。

（続く）